

第5ダビデ詩集（詩138-145編）の構造と主題

—敵対者記述を手がかりに—

飯 謙

The Antagonists in the Fifth Davidic Psalter (Pss. 138-145)

II Ken

Abstract

In this paper, I have considered the structure and the theme of the Fifth Davidic Psalter (Pss. 138-145), by examining its descriptions of the antagonists. At first I have analyzed the headings of the psalms in the Fifth Davidic Psalter. I have divided the psalms into three groups, that is Ps. 138, Pss. 139-142, Pss. 143-145. In Ps. 138, the psalmist shows that all the kings of the earth, namely the antagonists, belong to those who praise YHWH, and does not criticize the antagonists. The second group takes over the stance of Ps. 138. Psalmists of the group restrain hasty criticism. In the third group, there are various positions to antagonists. In Ps. 143, the psalmist wishes a punishment to them. In Ps. 144, however, the psalmist tells only liberation from them, not a punishment to them. In Ps. 145, the psalmist states that "all flesh" are those who bless YHWH. In the beginning of this Psalter, the psalmist mentions that "all the kings of the earth" shall praise Him, and in the end of this Psalter, "all fresh." Here we have pointed out the progress of the descriptions. The redactors of the Fifth Davidic Psalter has tried to show the spiritual place in which persons, who have different mentalities, can be guided to reconciliation.

キーワード：旧約詩編の編集史、旧約詩編の配列、第5ダビデ詩編、敵対者、脱神殿

Key words: redaction of the Psalter, contextual reading of the Psalter,
the Fifth Davidic Psalter (Pss. 138-145), Antagonists, de-temple ideology

0. はじめに

旧約詩編における敵対者の問題は、H.-J. クラウスやM. E. テート、関根正雄ら、独語圏、英語圏、そして邦語を代表する大部な注解書の執筆者が必ずと言ってよいほど取り上げている主題である¹。それは、'wjb, rs'; p'lj-'wn といった敵対者の語彙を特定することによって、作品創作の状況をより鮮明に描き出し、より厳密な解釈が可能とされると考えられたからである。

筆者も以前にこの問題を考察した²。その議論において重要な役割を果たした研究者として、19世紀のR. スメントやA. ラルフス、さらに20世紀の前半では、S. モーヴィンケル、H. シュミットらの名が思い浮かぶ³。多くは旧約詩編に登場する「わたし」を集散的に捉え、「イスラエル」や共同体内部の敬虔な者と解し、教団内部の抗争も想定した。他方、20世紀後半のH. ビルヘラン、S. N. ローゼンバウム、S. J. L. クラフトらは、異なる見方を提案した⁴。ビルヘランは旧約詩編に登場する「わたし」を王や戦いの指導者と考え、「敵対者」を基本的に異邦人であると見た。ローゼンバウムはビルヘランの見解が厳密さを欠くと批判し、'wjb は異邦人、rs' をヤハウエに反するイスラエル人と規定した。しかしクラフトはローゼンbaumの原則から外れるテキストを示し、この研究において、辞書的な意味の確定が有意性をもたないことを暗示したのである。それらを受け、筆者は、旧約詩編における敵対者の理解は、統一的な見解のもとで、ある単語が指し示す敵対者像の確定を目指すのではなく、文脈の中で何が語られているかに着目し、そこで与えられた意味を考察するべきであるとの考えを示した。その他、L. デリカットやW. バイアリンは、「敵の詩編」を個別に検討し、神殿における嫌疑者受け入れの制度や裁判制度を念頭に解釈を試みている⁵。しかしそれらも想定域を出ず、具体的な論拠を欠いていた。筆者は、N. フェクリスターやE. ツェンガーらに学びつつ⁶作品間の連作性を念頭に置いた「移行」の概念による分析を試みるよう提唱し、詩編15-24編をモデルとするケース・スタディを展開した。その結果、当該の小詩集において敵対者表象は、特定の人物像を描くためではなく、驕る者とへりくだる者とのコントラストを明確化するところに意図があることを明らかにした。すなわち、文献史的に見るならば、旧約詩編が含む個々の作品が執筆された際、それぞれの作者にとって特定の敵対者は存在したであろうが、最終形態へと結集、編纂されるにあたり、それらに新たな意味が付与されたということである⁷。われわれの目標は、テキストの最終形態における意味の読み取りにある。

他方われわれは、旧約詩編最後の「ダビデ詩集」(詩138-145編)、いわゆる「第5ダビデ詩集」についての議論を重ねてきた⁸。この作品群は、マアロート詩集(詩120-134編)⁹ およびそれに続く無表題詩集(詩135-137編)¹⁰ と、旧約詩編の掉尾を飾る大ハレルヤ詩集(詩146-150編)とに囲まれた位置にある。われわれの関心は、「第5ダビデ詩集」のマアロート詩集以降の作品群におけるコンテクスト機能、さらには旧約詩編第5巻におけるコンテクスト機能、そしてその編集者像の考察に収斂する。その考察にあたり、敵対者像の検討は必須の事柄である。これにより、対極に立つ編集者グループを窺う可能性も開けるであろう。そこで本論文で

は、当該詩集における敵対者像を読み込み、これが含まれる作品群全体を包括的に理解する一助としたい。

1. 小詩集内の小集合の問題

われわれは旧約聖書の詩編が連作として構成されたいくつかの小詩集の結合から形成されているとの仮説をもって、この作品群を分析してきた。それらの小詩集は独自の小集合をもって独自の構造を示している。この第5ダビデ詩集という小詩集は、どのような構造を有しているのだろうか。ツェンガーは第5ダビデ詩集について、賛歌である詩編138編と145編が外枠、その次を信頼の歌である139編と144編が囲み、その他の140-143編が嘆願の祈りとして中核部分を形成する次のような集中構造を指摘した¹¹。



われわれはこの構造分析に一定の理解を示すものの、ツェンガー自身が逡巡する詩編139編と144編との関連づけに疑義を覚える¹²。筆者には、ツェンガーとホスフェルトが、単語レベルやモチーフレベルの類同性を優先して集中構造の作成を急ぐあまり、内容の連続性に対する注意を疎かにするよう感じられる¹³。そこで、G. H. ウイルソンの指摘に学び¹⁴、この詩集の表題を読み込むことから、第5ダビデ詩編の構造を考える手がかりを得たい。この詩集の表題は次の通りである。

138.	<i>ldwd</i>	
139.	<i>lmnšḥ</i>	<i>ldwd mzmwr</i>
140.	<i>lmnšḥ</i>	<i>mzmwr ldwd</i>
141.		<i>mzmwr ldwd</i>
142.	<i>mškjṛ</i>	<i>ldwd bhjwṭw bm'rh tplh</i>
143.		<i>mzmwr ldwd</i>
144.		<i>ldwd</i>
145.	<i>thlh</i>	<i>ldwd</i>

第5ダビデ詩集は一度として同じ表題が並ぶことのない、異例な形態と評してよいであろう。すべてに共通するのは「ダビデに」と訳される *ldwd* のみで、中央部の詩編142編はダビデの故事に由来するフレーズを記述していて、ひととき異彩を放っている。その他、目につく記述は、筆者が通例「伴奏付」と訳す *mzmwr* である。小詩集の中で、詩編139-141編と143編が

この歌集から採用されている。そのように見ると、詩編139-141編が一つのまとまりであり、142編にある種「移行面」的な中間休止を想定できよう。そして詩編143-145編は、同じダビデ歌集ではあるが、それぞれ異なる分類から選ばれたものと考えられる。

そこでわれわれは以下の分析において、「連作性」という基本に立ち帰り、作品順に読むことを原則とする。しかしながら、表題から見て取れる小さな休止も念頭に置いて、詩編138編を先行詩集からの移行面の作品と性格づけて独自に取り扱い、続く139-142編を一つのまとまり、その後の三作品をもう一つのまとまりと位置づけ、考察に進むこととする。

2. 詩編135-137編と138編

一般的に詩編138編は「個人の感謝」に分類される。この作品に見られる敵対者の語彙は、「地の王たち」(*mlkj-rš* = 4節)と「敵」(*'jb* = 7節)である。旧約詩編の文脈を勘案するならば、「地の王たち」は、先行する無表題作品群(詩135-137編)に描かれた異邦人の王たち、すなわち、エジプトのファラオ(詩135:9, 136:15)、強大な王たち、力ある王たち(*mlkjm 'šwmjm*, *mlkjm gdljm*, *mlkjm 'drijm* = 詩135:10, 136:17f.)、アモリ人の王シホン(詩135:11, 136:19)、バシヤンの王オグ(詩135:11, 136:20)との関連で考えられることが望ましい。また王(*mlkjm*)という語は使われていないが、詩編137編7, 8節のエドムの子ら(*bnj 'dwm*)や娘バビロン(*bt-bbl*)も敵対者の語彙に数えてよいであろう。これらの言及の特徴は、すべて彼らへの懲罰を伴っている点にある。ただしそれがこの作品群で単調に繰り返されているということではない。詩編135編においては完了形でヤハウエによって実現した出来事として明確に述べられているのに対し、136編ではヤハウエの行為としてではあるが分詞形と未完了形で描写している。そして137編では、ヤハウエにはエルサレム破壊の屈辱的な事件を記憶することのみを命令形で願った後(*zkr*)、祝福の形式を反語的な呪詛の意味合いで用い、ヤハウエ以外の第三者が報復するよう祈っている。したがってヤハウエは動作主としては退行していると評せる。

このヤハウエの介入から人的営為へと「退行」した移行をどのように評価しうるのであろうか。筆者は以前に、勝村弘也氏の論稿を手がかりとして、旧約詩編における「応報」(*Vergeltung*)と「行為・帰趨連関」(*Tun-Ergebnis-Zusammenhang*)の問題を整理した¹⁵。前者はある行為に対してある規範に照らした法的審理を経て処罰等の決定がなされるのに対して、後者はある行為に対して特定の結果が(法的審理なしに)必然としてして続く事態を指す。この理解を「行為・帰趨連関」から「応報」へと移行する詩編27-29編に援用したところ、この小詩集の編集者は、この移行によって敵対者への怒りを増幅させているとの結論を得た¹⁶。そのデータは、詩編27-29編とは逆の動きを示すわれわれのテキストの解釈にヒントを与える。すなわち、この文脈に「行為・帰趨連関」は見られない。詩編135編においてヤハウエによる「応報」を語った編集者は、137編ではヤハウエ以外の者による報復を訴えた。つまり報復の動作主から、静かにヤハウエを外し、それが人間の業であることを述べたことになる。

この前提から詩編138編に目を向けると、詩編の文脈は怒りを沈静させる流れにあることが読み取れる。この作品で「地の王たち」は、先行作品に見られたような軍事的性格を剥奪され、ヤハウエを「讃える」者となることが願われる。4節bで接続詞 *kī* に導入されるその根拠は、

ヤハウエが「傲る者を知る」(gbh…jd'=6節)ことであった。詩人はこの事柄を包括的に、ヤハウエの「慈しみのゆえに、また……真実のゆえ」(l'hsdk w'l'mtk=2節)と評している。そうして詩人は「敵('wjb)の怒りを越え」(7節)るリアリティに目を見開かれたのである¹⁷。この場合の 'wjb は、この語が異邦人を指すとするローゼンバウムの指摘にしたがうならば「地の王たち」ということになるが、上述したように彼らに軍事的・攻撃的な性格は付与されていないので、文脈上は異邦人ともイスラエル人とも解せる¹⁸。詩編135編以降、敵対者は明白に異邦人であったが、138編はそのような仕方では従前の敵対者概念を緩和させる方向に筆を進めたと言える。この緩和のモチーフは、続く詩編139編でそれはどのように観察されるであろうか。次節において取り上げたい。

3. 詩編139-142編

1) 詩編139編 この作品で敵対者は19-22節に登場する。しかしながらこの段落における敵対者象徴は、唐突と感じられる。すなわち、この作品は冒頭から神の全知と遍在を述べ、詩人はたいへんへりくだった言葉を連ねてきたにもかかわらず、ここで敵対者への憎悪の念をあらわにしているからである。それゆえ、死海写本発見以前の積極的に本文批判を繰り返していた時代、研究者はこの段落を後代の挿入として、原テキストから区別していた¹⁹。では、このテキストは文脈からまったく浮き上がった、無意味な装飾と位置づけられてしまうのだろうか。無論そうではない。われわれはこの段落内の移行に目を向けた。すると、詩人は当初 'm に導入される仮定法で、神に敵対者を「殺す」(qtr=19節 a) よう叫んだ。しかしその直後に彼(単数)が自身から「離れ去る」(swr) ようにと論調を変え、最後は神と「憎しみ」(sn') を共有する——したがって、神を主体とする考えへと「クール・ダウン」²⁰ させている。そこでこの作品の文脈に沿って考えるならば、こういうことになる。詩人は、自身が神に知られているという驚きを表明し(1-12節)、神との深い関わりに心を啓かれた(13-18節)。その結果、その人物への敵愾心を抑制した、と。

このように見ると、詩編138編と139編は、先行作品から引き継がれた敵対者へのあからさまな感情表出を抑えている点で共通していると言える。しかしここでわれわれにとってより大きな問題となるのは、詩人が敵対者に向かって、「離れ去る」よう指示していることである。このフレーズは、この人物が詩人の身近にあることを暗に示している。それによれば、この敵対者は「企みのために、(神に)語りかけ」(20節 a)、神への「敵意」(r=20節 b)²¹ を隠さない人物だという。いま与えられた材料だけでこの人物像を絞り込むのは困難である。そこで本項での当該問題に関する議論はここまでとし、詩編140編以下の作品の検討へと進むこととしたい。

2) 詩編140編 この作品では多数の敵対者が言及されている。まず2節に「悪い人」('dm r')、「暴虐のひと」(jś hmsjm = 5, 12節)、5節に「不正な者」(rs' = 9節)、6節に「驕る者たち」(g'jm)、そして12節には「舌のひと」(jś lswn) という表現が見られる。このテキストは最初の段落の二連に、命令形で始まり未完了形と完了形が続く、同一形態の嘆願を記している²²。

- 2 a. わたしを引き出してください (*hlš*=命令形)
 b. あなたがわたしを暴虐のひとからまもってくださいますように。(*nšr*=未完了形)
- 3 a. 関係詞'*šr* + *hšbw* (完了形=彼らは思い謀る) ……
- 5 a. わたしを守ってください (*šmr*=命令形)
 b. あなたがわたしを暴虐のひとからまもってくださいますように。(*nšr*=未完了形)
 c. 関係詞'*šr* + *hšbw* (完了形=彼らは思い謀る) ……

この同一の言い回しの最後に語られる「思い謀る」ことの内容は、3節では「心の中」での「禍」であり、敵対者は「舌」(*lšwn*)をもって準備をしている。他方、5節では詩人の「進路を挫く」ため罫を張り巡らせと、その行動を明白にエスカレートさせている。それを受け、7節以降で詩人はヤハウエに呼びかけ、9節以下で報復を願う。その際、10節以下に綴られた報復の具体的内容は、すべて三人称複数形形の未完了形動詞を用い(彼らが……となるように)、ヤハウエの直接介入の表象を避けている。これは、意味論的には「行為・帰趨連関」ではなく、ヤハウエの手による応報ではあるが、詩人は注意深く緩やかな表現を採用していると思われる。そして総括部分(13-14節)で、詩編135編5節にも用いられた告白導入の定式 *jd't* により²³、ヤハウエが「貧しい者」(*'bjwn*)、「乏しい者」(*'nj*)の側に立つこと、すなわち単なる「応報の神」ではないことを述べ、作品を締め括る。われわれの考えるところ、13-14節は編集者の手による7-12節への反論と考えられる。

3) 詩編141編 ここに見られる敵対者の語彙は、4、9節の「災いをなす人たち」(*[j'sjm] p'lj'wn*)と10節の「不正な者たち」(*rs'jm*)である。先行作品に比して、敵対者の語彙レベルでの重なりは少ないが、その他の点では多くの類似点が見出され、双方の連続性が確認される。それはたとえば動詞では、神に救いを願う「守る」(*šmr*=140:5, 141:3, 9)や「まもる」(*nšr*=140:2, 5, 141:3)であり、また名詞としては、敵対者の行為として「舌」(140:4, 10, 141:3)、「鳥網」(*ph*=140:6, 141:9)、「おとり」(*mwqs*=140:6, 141:9)があげられる。

詩人は作品の前半で、自身が敵対者に吸収されぬようにと願い、義人による叱責を乞うている(4-5節)。上で、詩人と敵対者の関わりについて言及したが、4節c「災いをなす人たちとともに」(*'t'j'sjm p'lj'wn*)を勘案すると、この作品の詩人は敵対者と同一グループに属していると思われる。詩編1編の詩人も、自身が *rs'jm* や *h't'jm*、あるいは *lšjm* に代表される「罪人」と融和する可能性に触れていた。また詩編55編にも敵対者が詩人自身の日常性の中に溶け込んだ存在であることを示唆する箇所がある²⁴。しかしそれらには必ず敵対者への報復祈願やその確信が伴っていたが、われわれのテキストにおいては、それが明らかなかたちでは見られない。

この点で詩編141編5b-7節は議論を呼ぶテキストである。それは、このテキストが、報復祈願に近い叙述を含んでいるからである。ただ原文の破損が激しく、判断が困難な状態にある。すなわち、この箇所の原文 *šmn r's 'l-jnj r'sj* は、主語も分かりにくい。とりわけ、*r's* と *r'sj* とを関係づけにくい²⁵。そこである者は、七十人訳に基づく本文批判により、*r's* を *rs'* とする読

み替えを提案し²⁶、また別の者は本文から削除した²⁷。後者の問題性については、述べるまでもない。前者はこれによって「不正な者の油をわたしの頭が飾ることがありませんように」と訳し、一定の支持を得ている²⁸。しかしヘブル語写本レベルの根拠はなく、またアレフ (') とアイン (') の書き損じが起こったとも考えにくく、七十人の訳者による誤訳の可能性も否定しきれない。それゆえ、この提案を受け入れることはできない。他方、近年は、テキストの安易な改編を避け、伝承本文を尊重する傾向が顕著で²⁹、次のような新たな理解が提出されている。K. ザイボルトは、*smn r's* が「頭への注油」を意味すると述べている³⁰。また Th. プーイは「頭」を意味する *r's* を本文のまま「最良」と解し、5節を並行法として、「義人が慈しみをもってわたしを打ち、叱責しますように。油は最良で、わたしの頭が拒否することはありません」との訳を提案している³¹。彼は叱責を「最良の油」ととっているのである。

彼らの伝承本文に忠実であろうとする姿勢は正しい。ただ本論文は、このような厳密な訳を巡る議論を十分に展開する余裕がなく、これについては別の機会を設けたく思う。ここでわれわれが問うべきは、詩人と敵対者との関係である。詩編141編5節bの訳文がいかなるものであれ、それはこの関係をどのように語っているとれるであろうか。詩人は敵対者へのあからさまな拒絶や災禍の到来願望を表明してはいない。それは、われわれの見るところ、詩人がこの人々と共同の場に身を置いており、そこにとどまらざるを得ない境遇にあるからである。この理解のために、先行作品にも見られた「鳥網」や「おとり」が手がかりとなる。詩人は、詩編140編では5-6節で「鳥網」と「おとり」について述べ、12節では回りくどい言い方ながら、敵対者が、鳥網やおとりを暗示する「悪」に「捕られる」(*šwd*) よう願った。敵対者が詩人を出し抜くためこの種の行動に出る場合（たとえば詩7:16-17や9:16、35:8など）、イスラエルの伝統的なロジックである自業自得の論に向かわせることもできたはずである。しかし不思議にもここではそれを行っていない³²。詩人は、極端な行動を留保し、それにある種の「ためらい」を表明しているのである。われわれはこれについて拙速な評価を避け、後続の作品を検討することとしたい。

4) 詩編142編 詩編142編にも敵対者の語彙はあまり目立たず、7節の「わたしを追う者たち」(*mrdpj*) が指摘されるのみである。しかもこの人々の行為に直接言及するテキストはない。ただ4節の「鳥網を仕掛ける」(*tmn ph*) がそれを示唆するものである。この言い回しは、旧約詩編では140編6節とこの箇所との二つしか用例がない³³。それゆえ、詩編142編4節は、明らかに先行作品を意識したものと見なせる。しかし詩編140編では6節で敵対者が「鳥網をしかけ」ることを述べ、12節で緩やかな表現ながらも彼らへの報復を願っていたが、142編では、その人々への報復は一切語らない。ただそこから救いを言い表すのみである。そして敵への報復祈願も一切していない。われわれはこの点に移行を認めることができる。詩人は一方で5節で「顧みる者」(*nkr*=ヒツフィール分詞形) の喪失に言い及んでいる。他方、この作品は詩編140編14節、141編5節とともに、8節で「義人」(*šdq*) を取り上げている。この語は詩編141編では詩人を叱責する者とされていたが、142編8節では、詩人自身を冠とする (*kt*) よう述べている。ここから、詩人と義人との距離が埋められたことが感知される。また詩編140編13節

で義人が「貧しい者」と「乏しい者」との並行法の中で肯定的に触れられていることを勘案すると、詩人が身を置こうとしている、権力機構とは距離を置く集団のイメージが明らかになってくる³⁴。詩人は、発言力を持ち、策を弄することもできる権力者たちに比較的近いところにありながらも、それに距離を置く人々にシンパシーを懐き、かつ双方の和解を願う者だと思われる。

以上、見てきたように、この小集合は敵対者を語る中で、詩人（引いては編集者）の共同体における位置を浮かび上がらせている。この小集合で詩人は、露骨な敵対者批判を避け、和合のモデルを示そうと努めているように思われる。われわれはさらに以下に続く第5ダビデ詩集の残りの作品群に目を向けたい。

4. 詩編143-145編

1) 詩編143編 詩編143編が示す、先行作品である142編との類似性、連続性は明らかであると思われる。その点、われわれが詩編142編を「移行面」と性格づけたことは正しいと考える。すなわち、詩編142編4節と143編4節には共通して、詩人が精神的に限界状況にあることが言い表されている (*tt'ṭp...rwḥī*)。また詩編142編4節で詩人は、自身が選び取った「旅路」(*yḥ*)に敵対者によって鳥網が仕掛けられていると訴えていたが、143編8節では（それゆえに）進むべき「道」(*drk*)を知らせるよう懇願している。その他、苦境からの「導き出し」(*js'*=ヒツフィール形/詩142:8, 143:11)への願いもある。この場面を造り出したのが「敵」(*'jb*)であり、3, 9, 12節に登場する。この人々は、詩人を死の恐怖に陥れている（3, 7節）。そこで12節で詩人は神に敵対者への報復を願う (*smt, 'bd*)。それも、ヤハウエの「慈しみによって」(*bḥsdk*) 実現する報復である。

先行する小集合（詩139-142編）で、敵対者は策を弄して（詩140:6, 141:9, 142:4）詩人を困難に陥らせた。にもかかわらず、詩人の敵対者表象は、穏やかな性格のものであった。すなわち、先行作品（詩138編）から引き継がれた自己抑制的な精神性を引き継ぐ言辞が展開されていた（詩141:3-5, 142:8）。しかし詩編143編の締め括りにおいて、あからさまな報復祈願が口にされたのである（詩143:12）。では第5ダビデ詩集は、これをもって対敵対応の結論とするのであろうか。後続作品との関係を見極めたい。

2) 詩編144編 この作品は「王の詩編」に類別されるが、1-11節の戦争を前にした叙述と、12-15節の祭儀的な言表との差異から、個別作品の合作と考えられてきた。確かに前半を見ると、戦争の語彙が、1節後半 (*qrb, mlḥmh*)、4節 (*ḥs*)、10節 (*ḥrb*)と綴られているし、戦いに際する王の詩編である18編とも類似している。そこで、この詩編を前半と後半とに分けて論ずる注解書もある³⁵。最近、S. ホルツは古代メソポタミアの碑文を参照して、古代オリエントにおける王の機能を考察した。その結果、彼は、王に戦士として、同時にまた民に良き物を供与する者としての役割があることを明らかにした³⁶。それを前提とするならば、詩編144編はいささかの矛盾もなく、統一体と評せるというのである。しかしJ.H. ハンターは、前半のテク

ストを戦士としての王と解することに疑義を呈している。というのも、実際この文脈に盛られた異邦人の姿は、戦争に臨むそれではないからである³⁷。

144:7a 送ってください、あなたの手を、高さところから、

7b わたしを解き放ち、お助けください、大水から、異国 (*nkr*) の子らの手から。

8a その口が空しいことを語る者、

8b その右手は、偽りの右手の者。

このテキストは詩編144編11節とともに畳句として機能しているが、明らかに武力による戦争を念頭に置いていない。発言と行動の面に対立する人物への対応が問題となっている。このことは、すでに詩編140編で「蛇のように舌を研いだ」(140:4a)「戦いに寄留する」(140:3b)人々として語られていた。そして詩編141編3-5節で詩人は、敵対者のただ中であって自身がその敵対者に付和雷同せぬよう、自己抑制を図っていた。それゆえ、詩編144編7, 11節で用いられる「異国」(*nkr*)は、137編4節に登場するバビロニア人のような明らかな異国人とは異なる人を指している、つまりメタフォリカルな意味合いではないだろうか。そうであるならば、詩編144編の「戦争」(*mlhmh*)も、メタフォリカルなものと考えることができるのではないだろうか。旧約詩編を連作と見るわれわれは、先行作品とのつながりから検証したい。そこで詩編143編10節以下に目を向ける。

143:10a 教えて (*lmd*) ください、あなたの意志を行うために。

:

12a あなたの慈しみにより、わたしの敵たちを、無に帰してくださいますように。

12b あなたが必ず消え去らせませす、わたしを圧迫する者たちすべてを。

12c わたしこそが、あなたのしもべだからです。

:

144: 1a 祝されよ、ヤハウエ……

1b 教える (*lmd*) 方、わたしの手に戦いを、わたしの指に、戦争を。

:

10b 解き放ってください、しもべダビデを……

ここでは命令形と分詞形の違いはあるものの「教える」(*lmd*)が共通している。目的語部分に目をやると、詩編143編のそれはヤハウエの「意志」(*ršwn*)の実践である。詩編144編は、その流れの中にあるながら、「戦い」(*qrb*)と「戦争」(*mlhmh*)を教えるという。すると、この作品では、先行作品の詩編143編12節に書かれているような、敵対者を「無に帰させ」(*šmt* = ヒツフィール未完形)、「消え去らせる」('bd = ヒツフィール完了形)ような闘争を教えるというのであろうか。しかし後続の詩編144編に、その種の報復を願う言辞は現れない。望まれていることはそれではなく、上記テキストにある、空しく語り、偽りを行う「異邦の子ら」

からの「解き放ち」(*pšh*)と「助け」(*nšr*)である。そして10節では解き放たれる者として、しもベダビデの名が記される。このダビデは10節 a が複数形の「王たち」とあることから、ダビデの後継者、あるいはイスラエル全体の象徴と考えてよいであろう³⁸。続いて12節以下で収穫祭の祈りを思わせる、豊饒の祝福が記される³⁹。そうして13節では、民全体への祝福が述べられる。このような国家的祝福が語られる際、類似テキストには前後に敵対者への嘲りが付随している(たとえば、申33:29, 詩33:12⁴⁰)。詩編144編15節は、そのようなトゲが抜かれた、希なテキストと言える。したがって、ここでわれわれは詩編143編の結部で表明された敵対者への報復祈願の言葉が、もう一段弱められたと見ることはできないのではないだろうか。これが後続の詩編145編でどのように扱われているか確かめたい。

3) 詩編145編 この作品では、1-2節でこの祝福の対象を「わたし」が受け止め、それが讚美の主体となっている。これが3節以下では「彼ら」と三人称複数形に広がり、10節以下では「彼(ヤハウエ)の業のすべて」(*bkl-m'sjw*)、さらに14節では敵対者をも含む「倒れる者たち」(*nplim*)と「かがみ込む者たち」(*kwpjlm*)をもその範疇に納めていく⁴¹。そうして16節では「生ある者すべて」(*kol-hj*)、最後の21節では「すべての肉(なる者)」(*kl-bšr*)がその讚美の主体に数え、詩人たちの敵対者問題を解消へと向かわせる。終結部の20-21節では、われわれは反語的な展開を読み取った。すなわち、20節では典型的な律法主義的・民族主義的応報思想が描かれている。これが旧約詩編編纂の時代に人々の間に定着した論理であった。しかし編集者は作品を閉じるにあたり、それを提示した上で、ゆうゆうと覆すのである。「すべての肉が」と⁴²。

145:20 ヤハウエは、彼を愛する者すべてを、守る者、
不正な者すべてを、彼は滅亡させる。

21 ヤハウエの讚美を、私の口が語りますように。
すべての肉が、祝しますように、彼の聖なる名を、永遠に、いつまでも。

5. 結語

われわれは小論において、第5ダビデ詩集の敵対者像を検討した。それが作品群の編集者像や理念を抽出するために有用と考えたからである。われわれはまず簡潔に当該小詩集における段落設定を試みた。そして表題を手がかりに、第5ダビデ詩集が、詩編138編、139-142編、143-145編の小集合に分割されうことを示したのである。

旧約詩編が連作として構成された小詩集を結び合わせることによって成立したという理解に基づくならば、詩編138-145編は一つの詩集である。われわれは過去の研究から、しばしば小詩集の劈頭作品が、必ずしも集合体全体への結論を記すわけではなく、むしろ問題提起をなすケースが多いことを指摘したが⁴³、詩編138編の敵対者像の考察はその原則に合致するものであった。われわれの見るところ、詩編138編は、137編までの先行作品に残存する怒りを鎮めつつ、とりあえず異邦人(地の王たち)をヤハウエ集団に取り込む言辞を記した。その際、王

たちから軍事的・攻撃的なモチーフを取り去り、ただ讚美することを役割とする。そうして敵対者の性格から異邦人という対立的要素を取り除いた。

敵愾心に対する自己抑制的な動きは詩編139編にも観察された。続く詩編140編で敵対者は行動をエスカレートさせる。それに対して詩人は比較的緩やかな言表をもってヤハウエに報復を願うものの、最終的にその訴えを離れ、ヤハウエが弱者の側に立つとの告白をもって作品を閉じる。つまりここでも自己抑制的な心懐が見られる。そして詩編141編は、詩人が敵対者と社会的に近接した関係にあることを暗示する。われわれはそこに、詩人が強硬な発言をためらう理由を見ようとした。詩編142編で詩人は、自身が権力機構に近いところにもありながらも、それから距離を置く集団に共感を覚え、双方の和解を願う者と見られる。

そこに中間休止を見た後、われわれは続く詩編143編に再び敵対者への報復を願う声を聴く。しかしその後の詩編144編はそのような敵対者からの解放を語るのみであり、終結の145編は、敵対者とも合一された「すべての肉」をヤハウエ讚美の担い手として提示し、詩集全体を閉じる。われわれはこの最終のフレーズに、第5ダビデ詩集冒頭の詩編138編4節の言表との比較から次のような移行を観察することができる。

138:4 あなたを讃えますように、ヤハウエよ、すべての地の王たちが。
145:21 すべての肉が、祝しますように、彼の聖なる名を、永遠に、いつまでも。

旧約詩編の最終編集者たちは、恐らく彼らの作業以前に成立していたと思われるマアロート歌集（詩120-134編）およびその補遺的歌集として続く三つの無表題作品（詩135-137編）の中に神殿の神学を支えた思想をたいへん色濃く残す情念を感じ取った。その思想とは、エルサレムとシオンへの思慕の念、応報思想、そして民族主義である。われわれが考えるところ、神殿を中心とする神学の有り様をヤハウエ信仰に不適切なものと見て取った編集者たちは、教化的な意味を込めて詩編テキストの再編集を行った。そこで彼らは既存の詩編120-137編のまとまりに第5ダビデ詩集を結び合わせた。このダビデ詩集は、民族主義的な意識を解脱させる働きを備えていた。いま掲げた詩編138編から145編への移行がそれを示している。編集者たちは、当初ヤハウエ信仰確立のために他の王たちの服従を必要と考えた先達の作品を、ヤハウエの愛の対象を考慮する中で、越えるロジックに到達したと評することがゆるされよう。

参照注解書・翻訳

L. C. Allen, *Psalms 101-150* (WBC 21), 1983.

A. A. Anderson, *The Book of Psalms II. Psalms 73-150* (NCB 11/2), 1983.

F. Baethgen, *Die Psalmen* (HK 2/2), 1897 (1904³).

C. A. & E. G. Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms II* (ICC 16/2), 1907 (1960).

- M. Dahood, *Psalms III. 101-150* (AB 17A), 1970.
- F. Delitzsch, *Biblischer Kommentar über die Psalmen* (BKAT IV/1), 1894⁵ (1984).
- B. Duhm, *Die Psalmen* (KHC 14), 1922².
- E. S. Gerstenberger, *Psalms, part 2 and Lamentations* (FOTL 15), 2001.
- H. Gunkel, *Die Psalmen* (HK 2/2), 1929⁴ (1986⁶).
- E. J. Kissane, *The Book of Psalms*, 1964.
- R. Kittel, *Die Psalmen*, 1929.
- E. König, *Die Psalmen*, 1927.
- H.-J. Kraus, *Psalmen 60-150* (BK 15/2), 1978, 1989⁶.
- J. Olshausen, *Die Psalmen* (KHAT 14), 1853.
- H. Schmidt, *Die Psalmen* (HAT 1/15), 1934.
- K. Seybold, *Die Psalmen* (HAT 1/15), 1996.
- W. M. L. de Wette, *Commentar über die Psalmen*, 1856⁵.
- A. ヴァイザー (大友訳) 『詩篇(下)90-150篇』(ATD 旧約聖書注解14), ATD・NTD 聖書注解刊行会 1987.
- J. L. メイズ (左近訳) 『詩編』(現代聖書注解) 日本基督教団出版局 2000.
- C. ストゥールミュラー (飯訳) 『詩編』J. L. メイズ編『ハーバー聖書注解』教文館 1996所収
 勝村弘也『詩篇注解』(リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ) 日本基督教団出版局 1992.
 関根正雄『詩篇注解(下)』(関根正雄著作集第12巻) 新地書房 1981.
 関根正雄訳『新訳 旧約聖書 第IV巻 諸書』教文館 1995.
 松田伊作訳『詩篇』(旧約聖書XI) 岩波書店 1998.
 石川立『詩編73-150編』木田猷一監修『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局 2001所収
 飯謙『詩編1-72編』木田猷一監修『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局 2001所収

注

1. H.-J. Kraus, *Psalmen 1-59* (BK 15/1), 1978, 1989⁶, S. 112-117; M. E. Tate, *Psalms 51-100* (WBC 20), 1990, pp. 60-64; 関根正雄「詩篇における敵の問題」『関根正雄著作集』第12巻「詩篇注解(下)」新地書房、1981年、363-373頁。
2. 拙論「旧約詩篇における敵対者と編集層」『日本の神学』33(1994)9-28頁。一部削除、改変し、「旧約詩編における敵対者と連作性」との表題のもと、拙著『旧約詩編の文献学的研究』(新教出版社、2006年)230-239頁に再録。
3. R. Smend, *Über das Ich der Psalmen*, ZAW 8 (1888), S. 49-147; A. Rahlfs, *Ani und anaw in den Psalmen*, 1892; S. Mowinckel; H. Schmidt, *Das Gebet der Angeklagten im Alten Testament* (BZAW 49), 1928.
4. H. Birkeland, *Die Feinde des Individuums in der israelitischen Psalmenliteratur*, 1933. ders, *The Evildoers in the Book of Psalms*, 1955; S. N. Rosenbaum, *The Concept "Antagonist" in Hebrew Psalmography: A Semitic Field Study* (Diss. Brandeis Univ.), 1974 (UMI 74-28, 010); S. J. L. Croft, *The Identity of the Individual in the Psalms* (JSOTS 44), 1987.
5. L. Delekat, *Asylie und Schutzorakel am Zionheiligtum. Eine Untersuchung zu den privaten Feindpsalmen*, 1967; W. Beyerlin, *Die Rettung der Bedrängten in den Feindpsalmen der Einzelnen auf institutionelle Zusammenhänge untersucht* (FRLANT 99), 1970. それらについて筆者は、注2の拙著の79-81頁で論じている。
6. この理解については、拙論「ダビデ詩編巻末の歌——詩編145編の文献学的考察」『神戸女学院大学論集』(以下『論集』)54/2(2007)17-33頁の注1に記した諸文献、および注2の拙著の1.4。(18-20頁)を見よ。
7. 注2の拙論の24-25頁。ただし同じく注2に記した拙著に再録するにあたり、内容の重複を避けるため、詩15-24編の敵対者に関わる部分は削除した。

8. 拙論「神殿に立ち、神殿を發つ——詩編138編の文献学的考察」『論集』55/2 (2008) 1-13頁。同「彷徨する詩人——詩編139編の構造と主題」『論集』56/1 (2009) 35-51頁。および注6の拙論。
9. この作品群の成立史および文学的特徴については、拙論「マアロート歌集(詩120-134編)と旧約詩編の文脈——序説」『論集』53/2 (2006) 1-17頁を参照せよ。
10. この作品群の成立史および文学的特徴については、拙論「三つの無表題詩編(詩135-137編)——その主題と旧約詩編の文脈」『論集』55/1 (2008) 9-24頁を参照せよ。
11. E. Zenger, 《Daß alles Fleisch den Namen seiner Heiligung segne》(Ps 145, 21) Die Komposition Ps 145-150 als Anstoß zu einer christlich-jüdischen Psalmenhermeneutik, *BZ* 41 (1997), S. 1-27, S12.
12. ツェンガーは、上記注11の指摘にもかかわらず、E. Zenger, *The Composition and Theology of the Fifth Book of Psalms, Psalms 107-145*, *JSOT* 80 (1998), pp. 77-102, pp. 95f. では、140-144編を集合体とし、139編をそのグループ冒頭の作品と性格づけている。注6に記した『論集』54/2の拙論28頁および同論文の注23でも同じ指摘をした。
13. たとえば、注2に記した拙著の6.1.、詩編25-34編の構成に関する議論を参照せよ。
14. G. H. Wilson, *The Editing of the Hebrew Psalter* (SBLDS 76), pp. 155ff. は、旧約詩編編集プロセスの検討材料に表題文を用いている。
15. 勝村弘也「応報か、行為・帰趨連関か?」『基督教学研究』18 (1998) 1-27頁。
16. 拙論「『脱神殿』のうた——統一体としての詩編25-34編」『論集』48/1 (2001) 111-129頁、117頁、および注2の拙著158頁参照。
17. 注8に掲げた『論集』55/2の拙論の9-10頁を見よ。
18. Croft, *ibid*, p. 38は、この語が内国人である可能性を示唆している。
19. たとえば Briggs, *ICC* 16/2, の当該箇所を見よ。
20. 注8に掲げた『論集』56/1の拙論47頁。
21. この語の用例は、他にサム上28:16のみ。新共同訳は LXX の *ῥjm* (πόλις=町々) にしたがって読み替えている。
22. M. R. Hauge, *Between Sheol and Temple. Motiv Structure and Function in the 1-Psalms* (JSOTS 178), 1995, p. 27は、一人称単数完了形で始まる7, 13節が形成する二連を第二段落としている。
23. 他に詩20:7, 41:12, 56:10, 119:152に見られる。
24. 詩55:14ff. 当該テキストについては、拙論「詩篇55篇の文芸学的・社会史的考察」『基督教学研究』53/1 (1991) 85-106頁、94-96頁を参照せよ。
25. たとえば松田伊作訳の当該箇所「頭の油がわが頭を飾ることはありませんように」。これが直訳ではあるが、その訳文の意味は決して明瞭とは言えない。
26. Gunkel, *Psalmen*, S. 598は LXX (*ἀμαρτωλοῦ*) にしたがって *r's* を *r's'* と読み替えた。
27. Kittel やヴァイザーの注解の当該箇所を見よ。新共同訳や最近の Hossfeld と Zenger による注解も *r's* を訳していない。
28. RSV や NRSV, あるいは口語訳はこの提案を採用している。
29. 拙論「文芸学的方法」木幡藤子他編『聖書学の方法と諸問題(現代聖書講座第2巻)』日本基督教団出版局、1996年、43-60頁所収、56頁参照。
30. K. Seybold, Psalm 141. Ein Neuer Anlauf, in: W. Zwickel (Hrsg.), *Biblische Welten* (FS M. Metzger), 1993, S. 199-214, S. 204.
31. Th. Booij, Psalm 141: a Prayer for Discipline and Protection, *Bib* 86 (2005), pp. 97-106, pp. 100f.
32. 箴5:22, 26:27他。
33. 旧約詩編以外の用例は、エレ18:22のみ。
34. Hossfeld-Zenger, *Psalmen*, S. 759, 771f. は、詩人(編集者)が貧しき者の集団に属すると述べている。
35. たとえば、Gunkel, *Psalmen*, S. 604f. を見よ。
36. S. H. Holtz, The Thematic Unity of Psalm cxliv in Light of Mesopotamian Royal Ideology, *VT* 58 (2008), pp. 367-380.

37. J. H. Hunter, Interpretationstheorie in der postmodernen Zeit. Süche nach Interpretationsmöglichkeiten anhand von Psalm 144, in: K. Seybold-E. Zenger (Hrsg.), *Neue Wege der Psalmenforschung* (FS W. Beyerlin), (HBS1), 1994, S. 45-62, S. 59.
38. たとえば、Hossfeld-Zenger, *Psalmen*, S. 786を見よ。
39. S. Mowinckel, *Psalmenstudien II. Das Thronbesteigungsfest Jahwäs und der Ursprung der Eschatologie*, 1922は、詩編の多くを秋の収穫祭・新年祭と関係づける。この書で詩編144編には言及されていないが、当然その線上にある祝詞と解しうる。
40. 詩33:12でこの表現は民族主義のクライマックスとして記されている。注2の拙著273-287頁を参照せよ。
41. *Nplim* と *kpwpjm* とが敵対者をも含む概念となることについては、注4に記した『論集』54/2の拙論の24頁を見よ。
42. 詩145編20-21節のロジックについては、『論集』54/2の拙論の25-28頁および同注21を見よ。
43. 注2の拙著147頁。

(原稿受理 2010年3月18日)